

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 1 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ専攻
氏名	横塚彩

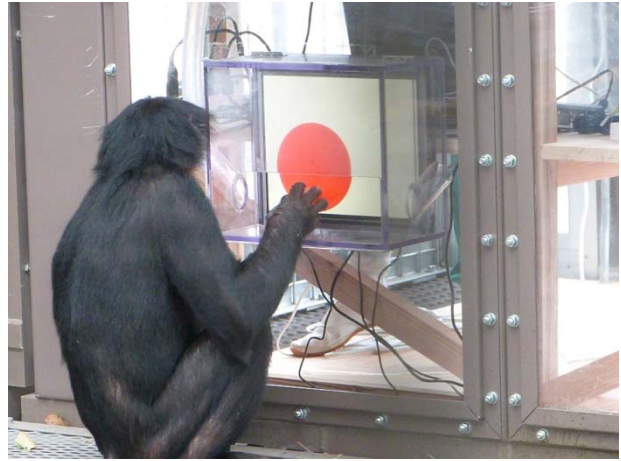
<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
野生動物研究センター・熊本サンクチュアリ
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
比較認知科学実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 17 日 ~ 平成 26 年 6 月 21 日 ( 5 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
熊本サンクチュアリ、平田教授、森村准教授
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
熊本実習では、飼育下のチンパンジーおよびボノボの行動観察、個体識別、認知実験の見学(アイトラッカー、タッチパネル、ブース実験)、飼育場の整備、清掃補助などを行った。
・実習期間は、残念ながらほとんどが雨天であった。 飼育下のチンパンジーは、私たちがケージに見学に行くと、おりにへばりついてこちらを見たり、大きな音をたててディスプレイを行ったりしていた。動物園で見るチンパンジーに比べ元気(？威勢)があり、初めての人に対する興味がとてもあるように感じた。職員の方が、人がきて近くまでくる個体は、人工飼育が多く、人が好きと教えてくださった。
・初めてのボノボにとっても感動したが、チンパンジーにくらべて小柄でほとんど声をだすことがなかった。2個体ずつ外に出ているためか、ほとんど社会交渉がなかった(ホカホカは度々観察することができた)。10歳を過ぎてもまだ子供っぽさがあり、やはりチンパンジーとは大きく異なると感じた。
・ボノボの初めてのタッチパネル実験を見学した。初めてであるにも関わらず10歳の個体は早々とやり方を覚えた。母親ボノボは時々画面にタッチしてリンゴを手に入れるが、そこまで率先してやっているような雰囲気はなかった。
・チンパンジーのアイトラッカー実験を見学した。何度も実験を経験している個体が実験を行っており、平田教授、森村准教授も各チンパンジーの個性を理解し、モニターに集中させるような声かけを行っていた。一頭、一頭とてもスムーズに実験が進んでいったように思う。
・狭い空間でエンリッチメントをどう充実させるか： 相性を見極めて、グループごとに飼育する。また日によってグループメンバーを代えるなどの対策が行われている。森村准教授から、「人」と「アニマルエンリッチメントの充実」の難しさについて伺った。エンリッチメントを充実させようとすれば究極は人(お客さん)を排除しないといけないが、それでは運営することはできない。人は見たい動物が見ることができて、初めて満足感を得る。せっかく足を運んで動物を見ることができなかつたら誰もお金を払いたくないと思わない。エンリッチメントは、そういったバランスを保つのが難しいとお話してくださった。飼育下の動物は、かわいそうと言う人はいるけれど色々な制約の中、飼育下の動物たちがより自然に近い状態で幸せにいられるような整備を研究したり、考えたりする人たちの苦悩に改めて気づかされた瞬間であった。
・この実習を通して、各動物園の飼育の取り組みについて今後注目してみようと思った。私の研究は、アニマルエンリッチメントではないが、今後動物園に行く際には、単に動物に注目するだけでなく、アニマル福祉としてどんな飼育場作りを行っているのか、みてみようと思う。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



▲ブラック群誕生日会にて



▲Vijay、初めてのタッチパネルに挑戦



▲履修生に興味津々の Vijay

6. その他 (特記事項など)

平田教授、森村准教授をはじめとした職員のみなさま、興味津々に、手荒に出迎えてくれたチンパンジーのみなさん、私たちの観察におとなしく忍耐強く耐えてくださったボノボのみなさんに感謝いたします。ありがとうございました。